

「総合英語」の反省と問題点

中 村 裕 英

「総合英語」は平成10年度から初めて導入された授業形態であり、英語講座としては十分な議論を経て導入したつもりだが、学生はまだその趣旨を十分理解できていないとはいえない。表1—1を見ると、「5」が最も多いということは、だいたい漠然と理解していたという程度であり、「3」がその次に多いということは、その趣旨が十分に浸透していないということであろう。シラバスに掲載されている「総合英語」の授業の目標にはこう書いてある。「英語の高度な読解、聴解、表現能力を総合的に養成する。各担当教官により英語圏の言語、文化、社会に関する一つのテーマに沿った教材を用意し、視聴覚教材なども活用して授業を展開する。テーマを理解し、読解する能力とこれを基に議論したり意見を発表したりする能力を修得する。」この趣旨をある程度理解していると思われる学生の意見は、質問11（「総合英語」にはどのような授業を期待しますか）の回答を見るかぎり、「読み、書き、見る、話す、いろいろやっていきたい。」「リスニング、スピーキング、ライティング、リーディングのそれぞれの能力を必要とする授業」さらには「スピーキング、リスニング、リーディング、ライティングがすべて向上するようにしてほしい」というものである。最後の意見は「総合英語」に期待しすぎているような気がするが、しかし、表1—5を見てみると、たしかに期待度は高かったと言える。

私が実際にやった授業は、「映画の英語」のテーマで視聴覚教材として映画の一部を毎回見ながら、英語について解説し、英語で質問するものであった。テキストには『脱出』(TO HAVE AND HAVE NOT) という、1945年にワーナーブラザーズからリリースされた、ヘミングウェイの同名の小説の映画（モノクロ）の台本を使った。この映画は名作として知られているが、しかし学生にとっては「古すぎた」ようで、「もっと興味のわくものにしてほしい」「映画の内容をもっと話題作にしてほしい」「映画自体の内容が私には難しいし、おもしろい映画ではない」という意見があった。『ジュラシック・パーク』や『タイタニック』のようなカラーで、しかも巨額の制作費を投じた映画を見なれている学生には、相応しくなかったと反省している。そうした映画の台本は教科書としては入手困難であり、利用したくてもできないという問題があり、今後の課題として「映画の英語」を担当する複数の教官がそうしたテキストを作成することも考えられる。

一方で、この授業を受講して良かった点を聞いたところ（質問12）、「映画を見ながら勉強できた」「会話表現に親しみが持てた」「映画では、直訳とは違う日本語になることがよくあることが分かって良かった」「いつもは意識せず字幕だけで映画をみていたけど、英語でききとることに挑戦できる点」「『映画の英語』をきちんとみると、字幕スーパーと意味のずれがわりとあったので、今まで字幕に納得いかなかった理由がわかった」「ネイティブ・イングリッシュの会話とテンポが分かったこと」「会話表現へ親しみが持てた」「口語（会話）の英語の表現をみることできた」など、「映画の英語」で目標としていたことが、ある程度理解されたと感じた。モノクロの映画であったにもかかわらず作品自体に興味を持った学生もおり、「映画がおもしろかったこ

と」や「個人的に映画の内容が好きだったので見ていて楽しかった」という意見もあった。大多数の学生に受ける映画の選択の難しさを感じる。

しかし、良かった点として比較的が多い意見が「映画が観れた」「映画がみれたこと」という類の単純な回答であり、(教師の意図を理解しない学生の誤解だと思うが)「前期の総合英語は、ただの reading だったので」「前期の総合英語は実用的でなかったので」(二人だけ)、学生が感じた良いこととは、単純に英語の時間に「映画」が見れたことだったと分かる。とかく英語は読みものとして習い、それに不満を感じているので、「楽しめる」映画が見られるだけでも、得した気分になるのだろう。しかし、質問11の回答を見ると、総合英語への「過度の期待」というものも存在しており、4技能がすべて盛込まれているのでそれらが上達するとか、役に立つ英語が学べるというそうした期待には、どう応えていくべきなのか、悩むところである。それに近い授業をするには、周到に用意された視聴覚教材付きの「テキスト」が必要であり、教師の側にも「総合英語」を少なくとも数年は教授した「経験」が求められるだろう。

正直言って、私の「総合英語」の評価は、学生によれば表1—3で分かるように、「並み」である。ということは学生は「あまり楽しめなかった」ということであり、大いに反省している。私自身の自己評価は「並み」以下であり、もっと現代的な映画を選び、授業方法も工夫すべきだったと思っている。ここで私の授業のやり方をもう少し詳しく説明すると、映画の1シーンを字幕付きで見せ、もう一度字幕を消して(もっとも、字幕なしのビデオは発売されていないので、苦肉の策として、スクリーンを上げて字幕を画面からはみ出させて)、英語で書かれた質問用紙を配布し、解答を書かせるものであった。答えを学生に聞いた後で、映画の本文の意味を取り、もう一度、今度は字幕なしで見せる。本文の意味を確認する時には、2, 3シーン進まないで映画全部を見終えることができないので、教師が意識を付けた。『脱出』の会話そのものは平易だが、学生は場面にふさわしい訳をしてくれない。予習をほとんどしていない学生に訳を求めれば「映画の面白味」が伝わらないし従来の訳読に陥るので、教師中心となった。しかし、もっとやり方を研究するべきであったことは、学生の意見から明白である。「先生の説明を聞いてやっとわかった」という学生がいたので、あえて意識を添えていったのだが、学生は「訳読」と思い面白くなかったようだ。

こうした方法自体も、試行錯誤の後での苦肉の策であり、最初は「学生が予習をしてくる」ことを前提として、映画を二度見た後で、その内容について英語で質問し、答えてもらおうとした。そうすることで、ある程度の即興の会話ができると期待していた。しかし、69人という大人数のクラスではそうしたことは、(運悪く)当たった人だけしか経験しないし、しかもたいていは、英語の質問に対して口頭でどう答えていいのか分からない学生が多い。途中で、台詞の一部をペアで練習して、暗記させたりもしたが、隣の人の(うまい、あるいは下手な)英語が聞こえて、学生のやる気がすぐに失せてしまった。結局は、教師の後に付けて、よく使われる表現を声に出して繰り返すという、単純な方法しか取れなかった。即興でしていた英問英答は、「質問用紙」形式に変えてしまった。

結果的に、授業が単調になってしまい、「改善して欲しい点」という質問には、「ワンパターンにならないようにしてほしい。毎回ちがったことをするとかしてほしい」「ほとんどがリスニングみたいだった」「もっとテンポのよい授業」「はじめは面白かったが、だんだんあきがくる」などのコメントが寄せられた。表1—2に見られるように、ある程度、テーマと授業の一致度はあったようだが、表3を見ると、満足はしていない。それは一部には、学生の取り組み度(表1—4)

の低さのせいだが、私の授業の「ワンパターンさ」にも原因がある。授業は、結局、教師が中心になり、「こちらが参加するようにしてほしい」という注文も頂いた。「もう少し分かりやすい内容の映画にしてほしい」という意見もあり、果たしてどれだけの学生が「脱出」を楽しみ、どれだけの学生が良く分からなかったのか、いまだに良く分からない。こうしたことが、「総合英語」を学生が再受講したいとあまり思わない理由であろう。表6では「5」を選んだ学生が突出しているが、それは「どうでもいい」の別の意思表示であり、「1」「2」「3」を選んだ学生がかなりいることが、深刻である。

その原因は私の教授方法やテキストそのものに問題があることは間違いない。教師自身がこの授業をしていて楽しくなかったし、時には苦痛さえ感じた。学生に対して悪いと感じるから、よけいに苦痛であった。しかし、ここでは「総合英語」という新しい試みを自己の苦い経験を通して見直すことが、これから総合英語を担当する教官にとっても、それを担っていかねばならない英語教師集団にとってもより重要なことなので、自己批判と反省はこれくらいにして、本題に移ろう。

まず第一に言えることは、学生が「総合英語」に期待していることが分散していることがあげられる。「総合英語」を受講すれば、英語の「全体的な」能力が上がると、漠然と期待しているが、その期待に応えるには「総合英語」の教授形態と目的からしてほとんど不可能である。これに対して、スピーキングのクラス（文・法・総・経）では、学生数も少なく、学生の望んでいることも明確である。表2-1で理解できるように、彼らは「スピーキング」とは何かを十分理解しており、授業もその目標に一致していると感じている（表2-3）。「スピーキング」に対する期待度も高いので（表2-5）、取り組みも積極的である（表2-4）。したがって学生の満足度も高い。すべての学生が「5」以上を付けており（表2-3）、「10」を付けた学生もいる。教師の側も、学生が望んでいることがはっきりとしており、取り組みも積極的なので、授業がやりやすく充実感を味わうことができた。

しかし「総合英語」では、すでに見た質問11の回答からも分かるように、学生の期待が高いうえに分散している。したがって、学生の期待のどこに焦点を当てていいのかわかりにくい。「総合」という形容詞自体が、その形容詞を関した学部と同じく、なんでもありながらそれ自体としてはどれも専門でないということになる危険性を孕んでいる。「スピーキング、リスニング、リーディング、ライティングがすべて向上するようにしてほしい」という意見がそのことを端的に物語っている。

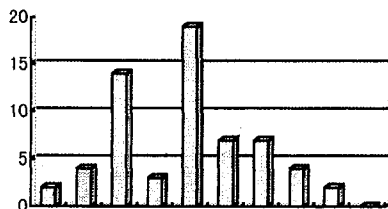
第二に言えることは、授業の人数が多すぎることである。「総合英語」は一つのテーマに沿って「総合的に」英語を学習するという目標を掲げ、その目標の実現のために、クラスの人数を7,80人に設定した。しかし、本当に学生のニーズに応えるためには、しかも学生が「参加」するためには、この人数は減らす必要がある。学生もこのことを実感している。質問10の「総合英語」の人数は何人ぐらいが良いかという質問に対しては、表7からも分かるように、30から50人と答えている学生が圧倒的に多い。小クラスを実現するために「総合英語」のクラスを犠牲にすることはやむをえないとする考え方は、学生の期待に著しく反している。「総合英語」を再受講したい学生が、表6によれば、「5」を最も多く選択していることは、まったく私の授業の至らなさのせいであるが、それ故にかえって、「総合英語」に内在している問題点も明確になったとも言える。学生の要求は多様なものであり、また知的興味よりも、実用的で「参加型」の授業を求めている。それを従来とは違った授業形態である「総合英語」に求めているのである。しかしそれ

に応えるためには、実践的な訓練を織り交ぜることのできる「小人数」のクラスが必要であり、テーマによっては視聴覚教室も利用しなければならない。

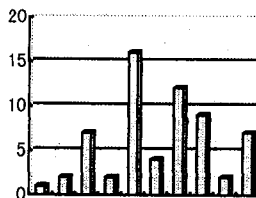
質問13の回答のなかに、「もっと話す機会がほしい」「日常生活に役立つような英語を扱った授業」「実生活に生かせるような英語を学べる授業」という意見が混じっていることは、彼らが「総合英語」の趣旨を理解していないということではなく、「総合英語」においてさえそうした期待を抱いているのだと理解すべきであろう。

資料1 「総合英語」アンケート結果

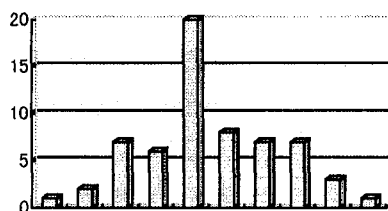
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	合計人数
総合英語理解度 (表1-1)	2	4	14	3	19	7	7	4	2	0	62
テーマと授業の一致度 (表1-2)	1	2	7	2	16	4	12	9	2	7	62
授業の満足度 (表1-3)	1	2	7	6	20	8	7	7	3	1	62
学生の取組度 (表1-4)	7	2	12	5	20	5	5	3	2	1	62
総合英語の期待度 (表1-5)	0	0	3	3	14	5	14	9	7	7	62
再受講希望度 (表1-6)	8	6	8	0	19	4	7	2	6	2	62
総合英語の人数 (表-7)	1	9	14	13	13	8	1	0	0	3	62



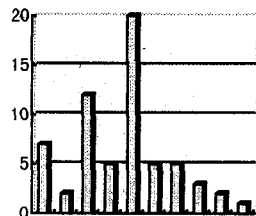
□ 総合英語理解度



□ テーマと授業の一致度



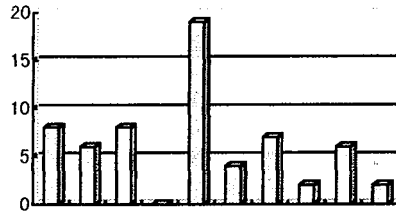
□ 授業の満足度



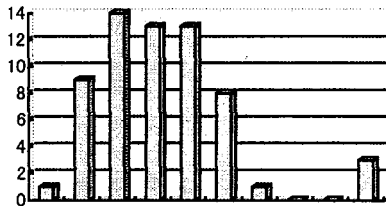
□ 学生の取組度



□総合英語の期待度



□再受講希望度



□総合英語の人数

「総合英語」アンケート

趣旨：今年度より開始された総合英語の授業について、現状の把握と今後の総合英語のあり方を考えるために、アンケートを実施します。学生諸君の率直な意見を反映するために無記名で実施し、成績評価とは関係ありません。以下の質問事項について回答をお願いします。

1. 学部学科 _____
2. 性別 _____
3. 総合英語の趣旨をどの程度理解していましたか。完全に理解していたことを10とし、全く理解していなかったことを1として、10段階のどこであったかを書いて下さい。(以下、10段階評価の場合はこれに準じる)

4. この授業のテーマ「映画の英語」と授業内容がどの程度合っていたかを、10段階で評価して下さい。

5. 総合英語の選択は、a. 第一志望、b. それ以外、c. 覚えていない、のどれに当たりますか。

6. この授業の満足度はどの程度ですか。10段階で評価して下さい。

7. 授業に対する自分の積極的な取り組みの度合いはどの程度でしたか。10段階で書いて下さい。

8. 「総合英語」に対する期待度はどれくらいありましたか。10段階で書いて下さい。

9. 今後も「総合英語」を受講したいと思いますか。10段階で書いて下さい。

10. 「総合英語」の人数は何人ぐらいが良いと思いますか。数を書いて下さい。

11. 「総合英語」にはどのような授業を期待しますか。率直に書いて下さい。

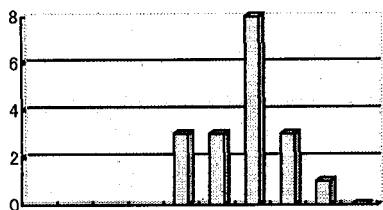
12. この授業を受講して良かった点を書いて下さい。

13. この授業で改善して欲しい点を書いて下さい。

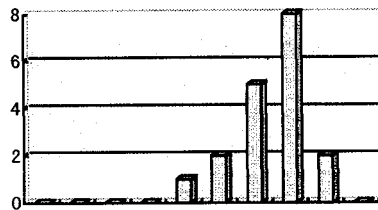
ご協力有り難うございました。

資料2 「スピーキング」アンケート結果

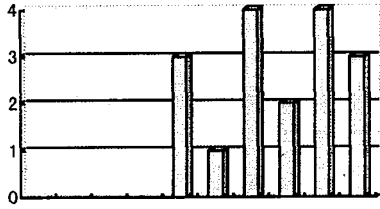
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	合計人数
「スピーキング」理解度 (表2-1)	0	0	0	0	3	3	8	3	1	0	18
テーマと授業の一致度 (表2-2)	0	0	0	0	1	2	5	8	2	0	18
授業の満足度 (表2-3)	0	0	0	0	3	1	4	2	4	3	17
学生の取組度 (表2-4)	0	0	2	1	2	6	3	3	1	0	18
「スピーキング」の期待度 (表2-5)	0	0	0	2	0	2	5	5	1	2	17
再受講希望度 (表2-6)	0	0	0	0	2	1	4	5	1	4	17
「スピーキング」の人数 (表2-7)	4	6	4	0	1	0	0	0	0	0	15



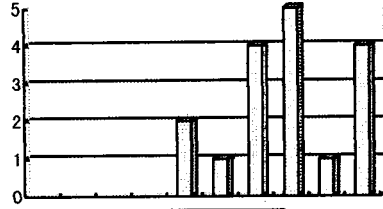
□ 「スピーキング」理解度



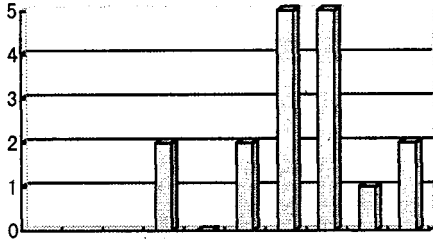
□ テーマと授業の一致度



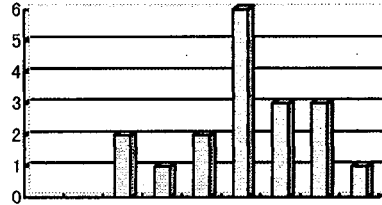
□授業の満足度



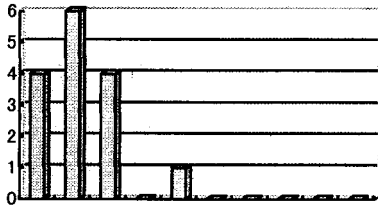
□学生の取組度



□「スピーキング」の期待度



□再受講希望度



□「スピーキング」の人数

注1) スピーキングのアンケートは「総合英語」を「スピーキング」に変更して行なった。

注2) 人数の表では、1段階が10人を表す。

ABSTRACT

A Comment on “Integrated English” Taught at the Faculty of Medicine

Hirohide Nakamura

“Integrated English” was introduced into the English curriculum for the sophomores of Hiroshima University for the first time in 1998 after a long judicious discussions among English teaching staff. We are not sure whether or not the introduction of “Integrated English” is a success or how it is welcomed by the students. I taught this new type of English class to the students of the Faculty of Medicine, so that I will make some comments from my experience. I used a text book, *To Have and Have Not*, which contains the movie script of Hemingway’s novel. To make sure how much my students enjoyed “Integrated English”, I asked my students to answer a questionnaire. Seeing the results of the questionnaire, we notice that my students are not satisfied with my teaching of “Integrated English” very well. This is partly because my way of teaching was not appropriate to “Integrated English” and the text was not the kind of textbook which invited students’ participation.

But from my experience and the answer sheets of the questionnaire, I noticed several intrinsic problems of this type of English teaching. First of all, although we agreed on the appropriate number of students in this class as about 70 to 80, most of the students answered that the appropriate number would be less than fifty. We should reduce the class size as soon as possible. Secondly, the students expect too much from “Integrated English” and this high expectation cause a low level of satisfaction with the class. They assume that they will be taught writing, speaking, listening, reading skills in “Integrated English.” But, it is practically very difficult to bestow such general skills on a large, heterogeneous group that has different expectations and different levels of English. For comparison, in my “Speaking” class, the level of satisfaction with the teaching and its content is very high. This is because their expectation is similar in a “Speaking” class, and the size of the class is small. In conclusion, we should reduce the size of “Integrated English” class and arrange its classes according to students’ interest.